目次

凡例……v

注釈　初学百首

春廿首（20首）1～20……1
夏十首（10首）21～30……36
秋廿首（20首）31～50……52
冬十首（10首）51～60……89
戀廿首（20首）61～80……105
雜廿首（20首）81～100……140
神祇　81、82……140
釋教　83、84、85、86、87……143
無常　88、89……150
別　90……154

旅……91、92、93、94、95
祝……96、97
物名……98、99
述懐……100

韻歌百二十八首和歌

春（16首）……1501～1516
夏（16首）……1517～1532
秋（16首）……1533～1548
冬（16首）……1549～1564
戀（16首）……1565～1580
述懐（16首）……1581～1596
山家（16首）……1597～1612
旅（16首）……1613～1628

千五百番歌合百首

春廿首（20首）……1001～1020
夏十五首（15首）……1021～1035
秋廿首（20首）……1036～1055

冬十五首（15首）……1056～1070
祝五首（5首）……1071～1075
戀十五首（15首）……1076～1090
雜十首（10首）……1091～1100

内大臣家百首

春十五首（15首）……1101～1115
夏十首（10首）……1116～1125
秋十五首（15首）……1126～1140
冬十首（10首）……1141～1150
戀廿五首（25首）……1151～1175
雜廿五首（25首）……1176～1200
旅五首（5首）……1176～1180
述懐五首（5首）……1181～1185
祝五首（5首）……1186～1190
神祇五首（5首）……1191～1195
釋教五首（5首）……1196～1200
解説……575
他出一覧……582

終わりに……588
索引……590
全歌自立語総索引……593
五句（各句）索引……627

凡　例

一、本書は、定家の初学・習作期の初学百首、達磨歌・新風歌風期の韻歌百二十八首、新古今歌風完成期の千五百番歌合百首、新古今後の反省転換期の内大臣家百首と、各期（1～4期）の代表的定数歌（集）の注釈を試みたものである。初めの初学百首は、治承五年（1181）、定家20歳の詠であり、百首歌の処女作でもある。組織・歌題はおおむね久安百首と同一とされている。二つ目の韻歌百二十八首は建久七年（1196）秋、定家35歳時に詠出したものである。三つ目の千五百番歌合百首は、建仁元年（1201）六月、定家四十歳の詠であり、この期は前述の第三期、新古今歌風完成期・妖艶風全盛期（建久八年（1197）36歳頃～建永二年（1207）46歳頃）と呼ばれ、定家の（歌）の脂の乗り切った時期とされる。この百首は新古今に7首（1016、1031、1050、1051、1073、1080、1082）とられ、率でいえば、御室五十首の6首には及ばないが、正治（初度）百首の3首と比べても高い。末尾の内大臣家百首は、建保三年（1215）九月十三夜の披講の百首であり、時に定家は54歳。谷山茂氏によれば、前述の如く、第三期に次ぐ四期（反省転換期・建保歌壇期。承元二年（47歳）頃から承久三年（60歳）頃まで）と呼ばれる。①16続後拾遺19〔定1106〕には、「建保二年…」とあるが、「三年」が正しい。この内大臣は、故良経の嫡男藤原（九条）道家のことである。この百首会には、家隆、慈円等も作品を寄せた。慈円は、③131拾玉3772～3871「詠百首和歌」能季、家隆は、③132壬二601～700「光明峰寺入道摂政家百首」として、新編国歌大観に所収されている。

二、本文は、『冷泉家時雨亭叢書　拾遺愚草　上中』（朝日新聞社）に拠った。歌番号は『藤原定家全歌集（冷泉為臣編）』に従った。翻刻の方針としては、原本に忠実であることを旨としたが、濁点を付し、新字など現行通行の表記にほ

ぼ従った。底本の歴史的仮名遣いと異なるものは、（　）で指摘した。

三、注釈は、〔（口語）訳〕、〔語注〕、「補説・参考事項（＝▽）」、〔参考（歌）〕、〔類歌〕の順とした。〔訳〕は原文理解のため、意訳ではなく、逐語訳とした。さらに〔参考〕は、勅撰集において①7千載集、私撰集において②10続詞花集、私家集において③129長秋詠藻（俊成）、定数歌集において④30久安百首、歌合、歌学書、物語、日記等において⑤174若宮歌合（建久二年三月）あたりまでとした。〔類歌〕は、それ以後――①8新古今集、②11今撰集、③130秋篠月清集（良経）、④31正治初度百首、⑤175六百番歌合より――である。

勅撰集などの本文については、おおむね『新編国歌大観』に拠った。また「和歌文学大系」（明治書院）のシリーズは、上記の名称を省き、例えば、「明治・万代〇」などとした。

略称は以下の如くである。

『新古今歌人の研究』久保田淳、昭和48（1973）年…『久保田・研究』
『藤原定家研究〈増補版〉』安田章生、昭和50（1975）年…『安田』
『定家の歌一首』赤羽淑、昭和51（1976）年…赤羽『一首』
『藤原定家（日本詩人選11）』安東次男、昭和52（1977）年…『安東』
『拾遺愚草古注（上）（中）（下）』昭和58（1983）年、同61（1986）年、平成元（1989）年、その中の「拾遺愚草抄出聞書（C類注）」、「拾遺愚草不審」（上）、「拾遺愚草抄出聞書（D類注）」、「拾遺愚草摘抄」（以上「中」）、「拾遺愚草俟後抄」（「下」）、なお未刊国文古註釈大系7に、「拾遺愚草抄出聞書」（B類注）が収められている。順に〈抄出聞書（C）〉〈不審〉〈（D）〉〈摘（抄）〉〈俟〉〈（抄出）聞書（・上・B）〉と略
『王朝の歌人9　藤原定家』久保田淳、昭和59（1984）年…『久保田・定家』
『訳注　藤原定家全歌集　上』久保田淳、昭和60（1985）年…『全歌集』

『藤原定家の歌風』赤羽淑、昭和60（1985）年…『赤羽』
『藤原定家研究』佐藤恒雄、平成13（2001）年…『佐藤・研究』

〈初学百首〉

近藤潤一氏ら四名『初学百首藤原定家拾遺愚草注釈』昭和53（1978）年…『初学百首』（なおこの著は非常に詳しいので、引用は簡略にせざるを得なかった）
脇谷英勝『日本文芸研究』昭和44（1969）年9月、「藤原定家の世界――初学百首を中心として――」…「脇谷」
田仲洋己『国文学（学燈社）』第42巻13号、平成9（1997）年11月号「藤原定家の本歌取一面」…「田仲」、後『中世前期の歌書と歌人』平成20（2008）年、に収録
細川知佐子『待兼山論叢』第41号、平成19（2007）年12月、「定家「初学百首」にみる「部立百百首を詠む」ということ――俊成『久安百首』の影響とともに――」…「細川（Ⅰ）」
同『語文』第九十一輯、平成20（2008）年12月、「定家の部立百首「春」の構成――「初学百首」を起点として――」…「細川Ⅱ」

〈韻歌百二十八首〉

兼築信行『国文学研究87』、昭和60（1985）年10月、「翻刻　中院通茂「韻歌百廿八首注」」…〈通茂〉

〈千五百番歌合百首〉

加藤睦『立教大学日本文学』第80号、平成10（1998）年、「藤原定家「千五百番歌合百首」覚書」…「加藤」
待田陽子『立教大学日本文学』第90号、平成15（2003）年、「藤原定家「千五百番歌合百首」の恋歌について」…「待田」

〈内大臣家百首〉

岩崎禮太郎『新古今歌風とその周辺』昭和53（1978）年、「第四章　建保期の和歌」、「1　内大臣家百首における定家と家隆との歌」、「2　内大臣家百首の定家の恋の歌における主情的表現」…「岩崎1、2」

なお、五月女肇志氏は、『藤原定家論』（平成23（2011）年）、「第一編　万葉摂取論――俊頼から定家へ」において、定家と万葉（の論）に言及される。定家の見た万葉集について、今後視野に入れて行くべきであろう。